

研究者としてのあり方を考えさせられる本（特集 アジ研流読書案内 -- 研究者が薦める3冊）

著者	桑森 啓
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	11-12
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045923

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊

研究者としてのあり方を 考えさせられる本

桑森 啓

ここでは、途上国に直接関係する本ではないが、私が現在の仕事を二冊ほど紹介している本を二冊ほど紹介したい。一冊はテレビ番組を単行本化したもの、もう一冊はインタビューを「聞き書き」という方法でまとめたもので、本としては幾分変則的かもしれないが、その分誰でも容易に読むことができる。以下の紹介文は、紙幅の制約もあり、私が印象に残った部分に焦点を当てているため、かなり一面的で偏った内容になっている。したがって、本の内容や魅力が伝えられているかどうか甚だ心許ないが、それはあくまでも私の力不足であることを予めお断りしておきたい。

●『NHKスペシャル 一〇〇年の難問はなぜ解けたのか 天才数学者の光と影』

本書は、数学上の難問のひとつとされていたポアンカレ予想が、二〇〇二〜〇三年にかけてロシアの数学者グレゴリー・ペレルマン（本書では「ペレリマン」と表記）によって解決されるまでの過程を紹介した本である¹⁾。ポアンカレ予想とは、フランスの数学者アンリ・ポアンカレが一九〇四年に提起した命題であり²⁾、宇宙の形状の解明にも繋がる重要な問題であるとして、多くの数学者が証明を試みたが、約一〇〇年間にわたり解決されてこなかった（春日「二〇〇八・二一五」）。難問が証明されたことと同時に、解決したペレルマンによる受賞や賞金の辞退といった行動が話題となったため、知っている人も多いだろう。ポア

ンカレ予想について解説した本は数多く出版されているが（たとえばオシア著「二〇〇七」、日本評論社編「二〇〇七」、中村「二〇〇四」など）、本書はテレビの特集番組の単行本化であるため、説明が平易で視覚や直観に訴える部分が多く、類書と比べても格段に読みやすいものになっている。もっとも、私のような門外漢にとっては、本書のような噛み砕いた説明を読んでもなお、ポアンカレ予想が何を意味するのか、またそれがどのような意義を持つのかについて、正確なところは到底理解できない。ただ、本書で描かれるポアンカレ予想に挑戦してきた多くの数学者の人生からは、（ありきたりの表現になるが）困難な問題に挑戦して真理を追究することの楽しさ、難問の解決にすべてを捧げても、翻弄された挙げ句に

解決することができず失意の人生を送ることになるかもしれない恐ろしさ、さらには、難問に取り組む研究者の、時として命をすり減らすほどの努力の凄まじさなど、研究という仕事の本質を窺い知ることができる。もちろん、ペレルマンをはじめとする一部の数学者の生活はあまりに人間離れしていて、さまざまながらみや欲に囚われて生活している私たち一般人には到底真似のできるものではない。しかし、毎年の予算の確保や執行、成果の提出、その他諸々の事務手続きといった現実的な問題への対応に追われる結果、リスクのある野心的な研究テーマを敬遠し、見通しの立てやすい（期限内に成果の見込める）比較的 안전한研究テーマへと流れてしまいがちになる私のような初心者にとっては、本書は読み返すたびにそのような態度を戒め、研究者として本来あるべき姿を再認識させてくれる。

●『木のいのち・木のこころ 〈天・地・人〉』

本書は、法隆寺大工として法隆寺の解体修理や薬師寺の伽藍再建に携わった西岡常一棟梁と、その

弟子の小川三夫棟梁、そして小川棟梁の弟子達に対して、作家の塩野米松氏が行ったインタビューをまとめたものである。主として西岡棟梁と小川棟梁が自らの宮大工としての人生を振り返ることにより構成されるその内容は、寺社建築に際して宮大工の間で伝えられてきた道具や建築技法に関する知恵から、文化財の保存に対する考え、徒弟制度に基づく弟子の育成を通じた技術の継承まで多岐にわたっている。経験が淡々と語られているだけではあるが、一〇年を超える丹念な取材を通じてまとめられた文章からは、時代の波に翻弄されながらも、自然の木を活かして一〇〇年以上建ち続ける建築物を維持・建立し、技術を伝承するために職人達が苦悩・格闘する姿が伝わってくる。また、本書で語られている宮大工の技術・知恵やそれらの維持・継承方法には、私たちの生き方や仕事を行ううえでの示唆が含まれているものも少なくない。そのなかで、特に私の印象に残っているのは、多くの職人を束ねる棟梁（匠長）のあり方について述べた法隆寺大工に伝えられる一連の口伝である。口伝の具体的な文言や意味などの詳細に

ついては、本書の説明に譲らざるを得ないが（一三七―一四三ページほか）、ここでは、棟梁には一倍の謙虚さと、先人や他の職人達に対する敬意と配慮が必要であることが説かれている。寺社建築においては、完成した建物に建立に携わった宮大工の名前が残るとはまずない。もちろん、寺社の建築はあくまでも施主が発願し、宮大工は施主に雇われて建立を請け負う者という立場はあるにせよ、そもそも寺社の建築には多くの人の力や技術が必要であり、決して棟梁一人の力で完成させることはできないこと、そして直接に建築に携わる人々だけでなく、過去の先達の経験の蓄積の上に、今日の技術が成り立っており、棟梁など特定個人の功績に帰することはできないからである。もしも、棟梁が他の人々への配慮や敬意を忘れ、自らの功を強調することになれば、たちまち他の職人は棟梁の功績作りのための単なる人足に墮してしまふとともに、建築物に反映されている先人が積み上げてきた技術や知恵もすべてその棟梁一人が横取りすることになってしまふ。そのような棟梁のもとでは、到底一〇〇〇年も建ち続ける堂塔

を完成させることは不可能であろう。職人たちを束ねることができなくなることはもとより、功名心や利益に駆られるようになると、必ず「やつつけ仕事」を行うようになるからだ。

研究においても、大規模かつ長期間にわたる研究プロジェクトでは、寺社の建築と同様、多くの人々の協力が必要となる。また、過去に携わった人々の貢献（機関同士の協力関係の構築や試行錯誤の末に確立してきた方法論）に依存している場合も多く、必ずしも個人の業績が明確にできるものばかりとは限らない。一方で、研究の世界では、個人の業績（責任）が重視されるため、研究者は得てして自らの名前を残すことに躍起になりがちである。しかし、国内外の多くの機関や人々の協力なしには成り立たないプロジェクト（国際比較統計の作成）に、一介のメンバーとしてではあるが携わっている私にとつては、仕事の成果が多くなの人に支えられて生み出されるものであることを忘れて功名心に逸ることを強く戒めている法隆寺大工の口伝は、決して忘れてはならない心がけであると思つている。

（くわもり ひろし／アジア経済研究所 国際産業連関分析研究グループ「産業連関分析」）

《注》

(1)ペレルマンは、二〇〇二〜〇三年にかけてポアンカレ予想の証明に関する三本の論文を発表し、その後、約三年間かけて検証作業が行われた（春日「二〇〇八・一八二―二〇二」参照）。

(2)ポアンカレ予想は、具体的には「単連結な三次元閉多様体は三次元球面と同相である」と表現される命題である（春日「二〇〇七・四二」）。

《参考文献》

①春日真人「二〇〇八」『NHKスペシャル 一〇〇年の難問はなぜ解けたのか 天才数学者の光と影』NHK出版。

②ドナル・オシア著「二〇〇七」（糸川洋訳）『ポアンカレ予想を解いた数学者』日経BP社。

③日本評論社編「二〇〇七」『数学セミナー増刊 解決！ポアンカレ予想』日本評論社。

④中村亨「二〇〇四」『数学二一世紀の七大難問』講談社。

⑤西岡常一・小川三夫・塩野米松「二〇〇五」『木のいのち・木のこころ 天・地・人』新潮社。